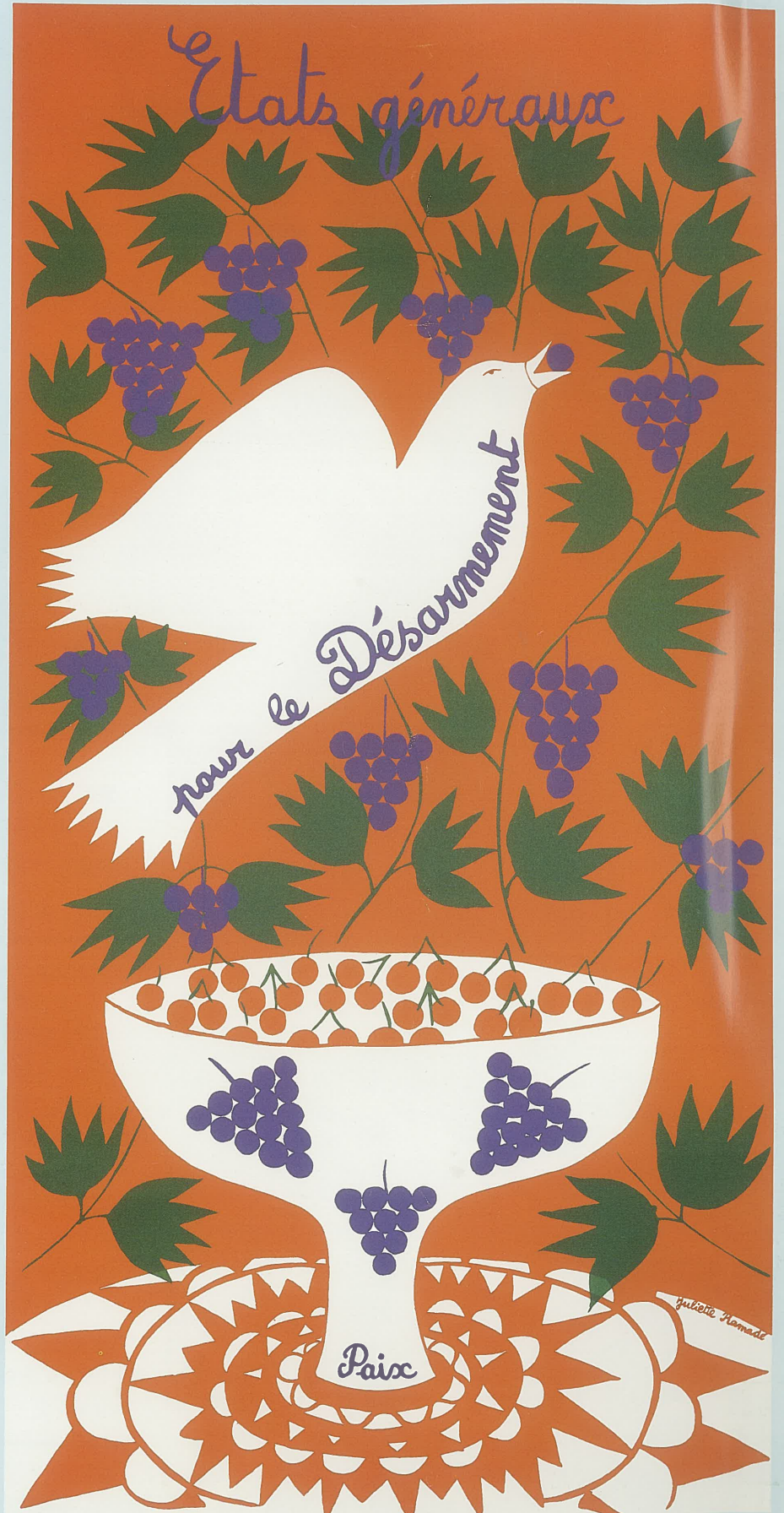


私の戦争体験

第13集

この子らの明るい未来のために語り継ぎます。



いずみ

特集号

1991年8月

COOD

いずみ市民生協

戦争体験

炎の中、濡れタオル
で顔をおおって



島原支部 平田節子

高岸戦争のおり、テレビに炎が写し出されると、思わずスイッチを切りました。思い出してしまつたのです。熱くて恐ろしいあの炎を……

母の背で目をじっかりつぶっていたても、道の両側の家が、めらめらと燃え上がる炎の勢いがわかるのです。今に母と私の体も燃え出すんじゃないかと思つて、熱くてならないのです。

母にいわれた通り、濡れタオルをきっちり目にあてていましたが、周囲が気になって、ちゅっとタオルをずらして見てみると、二階建ての家の柱がまるで炎の噴水のように、燃え上がっているのです。目をあけていたのは

ほんの一瞬、あったのに、睫毛がこけるかと思つほどの熱気が目に飛びこむのです。黒い煤煙が襲いかかってきて、あわててタオルを目におしあてます。あのタオルがなかったら、私の顔は火彫れになっていただでしょうか……

昭和二十年、私は六歳でした。

当時私の家は大阪市西区で旅館をしていました。現在パラ園で有名な親公園のそばで、近所に岡崎橋という橋があったように覚えていますが、兄が三人いましたが、長男はシベリアへ出征し、次男は昭和十八年、十九歳で肺炎で死亡しています。そして八歳の三男、未っ子の私です。結局その当時家にいたのは三番目の兄と私、両親の四人でした。

家の前に防空壕があったこと、夜に警報が鳴ると部屋の灯りを消したこと、そんな時分から外を見ると、地上から空に向けてサーチライトの光が、棒状に何本も交差して動きました。家の裏に深い井戸があり、その中へ布団や鍋、釜、茶碗などを入れたことなどを覚えています。

そしてあの夜(三月十四日)、空襲警報が鳴

り響き、私はいつものように防空頭巾をかぶりました。この頭巾の色は妙にはっきり覚えていたんですよ。表は黒、裏は赤、焼夷弾が雨のように降ってきて、「今夜の空襲はいつもと違う、防空壕では駄目だ」とにかく安全な場所まで逃げよう」ということで、母は私を背中にくくりつは、ねんねを着、更に分厚



いシールで私の頭を包み、濡れタオルを私に持たせ「節ちゃん絶対顔出したらアカンよ!目出したらアカンよ!」と何度もきつく言いました。市電の通りを、どの位母は走ったのでしょうか。記憶しているのは避難先に落ち着いたことだけです。おそろく無事な父と兄ともそこでおちあえたのでしょう……

すっかり焼けてしまった我が家へもどったのは、その翌日だったのでしょうか。例の井戸から布団などを引き上げ乾かしました。これだけでも助かったのは本当に幸いでした。

そして一家は母の知り合いを頼って、東大阪の花屋へいき、倉庫を借りての仮住まいを始めました。いつの頃からか、線路際の道端で、板を台にしただけの店が並びはじめました。両親もおから・たくわん・天ぷらなど御橋から仕入れてきて並べたりしました。生きるため、食べるため、子どもを飢えさせないためには何でもしなければならなかったのです。私は三野郷小学校へ通い出したのですが、翌年私達の家族は離散し、六月二二日(この日付は覚えていません)、私は父と三人、九州嬉野へいきました。母と兄に別れて、つつましやかな庶民の幸せを奪う戦争が、二度と起こりませんように……

用水桶の水を浴び 辿りついた兄の家



藤井寺北支部 T・M

小学校から学童疎開や縁故疎開をするように言われて、食料や物資の不足と共に、親も安全地帯を求め、大阪市内から阪神甲子園球場近くに越し、一年程で岡山工場へと戦火をおそれて転居しました。会社は軍需工場に成りましたので兄と主人は軍需となり、兵役は免れても、工場は資材不足で製造納期がおくれがちなため、軍からは厳しくとがめられ、軍からの監督官が常勤しておりました。中学生も学徒動員で、ゲートル巻で会社に毎日来ていました。

二十年三月十三日大阪大空襲の時、両親は市内で町会長をしており、疎開を促しても、生まれた此の地で死ぬのが本望と申されて、家は焼夷弾で丸焼け。妹と三人で火の中を逃げ、目が腫で痛んであけられなくて、名前を呼び合って用水桶の水をかけて、南海線ぞいを一晩中歩いて兄の自宅に着きました。真黒い顔だったそうです。主人は岡山で二



ユースを聞き、大阪に向いました。傷は落ち、黒焦げの死体がそこかしこ、両親の無事を心から祈ったそうです。

その後岡山も大空襲を受け、照明弾で夜空が真昼の様になり、ドンドンと腹の中までひびく音に、三人の子供と共に壕の中で三十分程ふるえて固りましたら、御近所が燃えたしたので消火のお手伝いや、社員が焼夷弾で太やけどしたというので、病院を捜して、火ぶくれの肌で食用油を持参して、三日間塗り続け看護しました。

現在化学繊維石油製品があふれて、いざ空襲とも成れば有毒瓦斯でひとたまりもなく死んでます。

戦争ほど大きな罪悪はありません。

太陽が地球の生物に大きなエネルギーを平等にふりそそぐ恵みに、日々感謝して、助け合いわがちあって、愛情ある人生を終えたいものです。

見渡す限り焼野原 転がる黒焦げの死体

土師支部

友沢真司さんのお母さん



昭和二十年、甥は五月、七月と米軍の空襲をうけました。それは思い出したくもない、恐ろしい光景であり体験でした。

当時私は十九歳で、両親と姉、妹二人第二人で百舌鳥赤畑町に住んでいました。父は病でほとんど寝たっきりで、頼みとする二三歳の兄は中国大陸へ出征中だったので。

私は安井町にある補助の会社に勤めていました。補助も戦時下ということで、航空兵の軍服などを作っていました。五月の中頃だったと思いますが、その日は車の命令で浅

半ゲートル巻(行軍する時、歩きやすくするために)

半ゲートル巻(行軍する時、歩きやすくするために)

半ゲートル巻(行軍する時、歩きやすくするために)

半ゲートル巻(行軍する時、歩きやすくするために)

半ゲートル巻(行軍する時、歩きやすくするために)

半ゲートル巻(行軍する時、歩きやすくするために)

半ゲートル巻(行軍する時、歩きやすくするために)

半ゲートル巻(行軍する時、歩きやすくするために)

半ゲートル巻(行軍する時、歩きやすくするために)

半ゲートル巻(行軍する時、歩きやすくするために)

半ゲートル巻(行軍する時、歩きやすくするために)

半ゲートル巻(行軍する時、歩きやすくするために)

半ゲートル巻(行軍する時、歩きやすくするために)

半ゲートル巻(行軍する時、歩きやすくするために)

半ゲートル巻(行軍する時、歩きやすくするために)

半ゲートル巻(行軍する時、歩きやすくするために)

半ゲートル巻(行軍する時、歩きやすくするために)

半ゲートル巻(行軍する時、歩きやすくするために)

半ゲートル巻(行軍する時、歩きやすくするために)

半ゲートル巻(行軍する時、歩きやすくするために)

半ゲートル巻(行軍する時、歩きやすくするために)

半ゲートル巻(行軍する時、歩きやすくするために)

半ゲートル巻(行軍する時、歩きやすくするために)

半ゲートル巻(行軍する時、歩きやすくするために)

半ゲートル巻(行軍する時、歩きやすくするために)

半ゲートル巻(行軍する時、歩きやすくするために)

半ゲートル巻(行軍する時、歩きやすくするために)

半ゲートル巻(行軍する時、歩きやすくするために)

半ゲートル巻(行軍する時、歩きやすくするために)

半ゲートル巻(行軍する時、歩きやすくするために)

半ゲートル巻(行軍する時、歩きやすくするために)

半ゲートル巻(行軍する時、歩きやすくするために)

半ゲートル巻(行軍する時、歩きやすくするために)

半ゲートル巻(行軍する時、歩きやすくするために)

半ゲートル巻(行軍する時、歩きやすくするために)

半ゲートル巻(行軍する時、歩きやすくするために)

半ゲートル巻(行軍する時、歩きやすくするために)

半ゲートル巻(行軍する時、歩きやすくするために)

半ゲートル巻(行軍する時、歩きやすくするために)

半ゲートル巻(行軍する時、歩きやすくするために)

半ゲートル巻(行軍する時、歩きやすくするために)

半ゲートル巻(行軍する時、歩きやすくするために)

半ゲートル巻(行軍する時、歩きやすくするために)



と、あちこちがバチバチと燃えたのです。三国ヶ丘に向かって線路の西側の、当時畑ばかりだった中を泣きながら三人で走りまわった。

やれやれと二息いれて南側をみると土師町の農家から煙りがあがっているのがみえました。家のごとく、家族のごとく心配でたまりませんでした。幸い家も無事でしたが…。

この日以来、警戒警報が発令されることが多くなり、着のみ着のまま眠ることになり



ました。家の中には畳一枚上げて入る小さな防空壕があつて、警報がでるたびに父と幼い弟や妹をいれました。

九日の夜十時頃警報が出て、すぐ解除されました。やれやれと思つたのもつかの間、午前一時頃再び警報が鳴り響き、外を見ると西側に焼夷弾が雨のように落ちてくるのが見えました。母と姉と私の三人で父をリヤカーに乗せて、少し離れた八幡さんまで逃げました。父の足がリヤカーからはみだしていて、腫が

血だらけになっていました。妹や弟連も無事に逃げのびてきて、一家は小さくかたまつて不安な朝までの時間を過ごしました。

幸い家は無事でしたが、堺は全市にわたつて大きな被害を受けたのでした。すぐ近くの百舌鳥小学校も全焼しましたし…。

翌日会社が気になりましたので、妹と二緒に安井町までかけてみました。旧市内は見渡す限り焼け野原でした。見知った建物がみんな消えてしまったのです。煙突が船のように曲がったり、あちこちの防空壕には、逃げこんだ人々がそのままの姿で黒焦げになっていました。土居川では消防団員が、川に浮かんでいる死体を棒で引き寄せて岸に並べていました。火に追われ、水を求めて飛びこんだ人、爆風に吹き飛ばされた人等、数えきれない位たくさん悲しい姿でした。しばらくは目に焼きついて離れませんでした。

翌十二日、父が心臓麻痺を起こし、意識不明のまま息をひきとりました。常々家族の足手まといになっていると気に病んでいた父でした。慌ただしい別れの後、家族で植楠をリヤカーに乗せ、大野芝の墓地で茶毘に付しました。

兄も三、四年後に無事に復讐してきましたし、私共は戦争の被害はほとんど受けていないといえますが、母の苦勞は大変だったとお

もいます。夫は病氣、長男は戦地、七人の子供をかかえ、食べるもの、着るもの、町内の訓練等々、姉も私も妹も、短らしいおしゃれもできなかった日々。戦争という国の非常事態に否応なく巻き込まれていった私達。身を守る武器のひとつも持たずただ逃げ惑うしかない私達。

戦争は庶民のささやかな生活と夢を粉々にします。こんな愚かしい戦争が二度と起こりませんように、心から祈ります。

(聞き書き)



涙で見えなくなった 夫、戦死の島

志紀支部 正谷カヲル(77)



戦後四十六年目の平成三年、巷には美味しい食物が溢れて飽食の世、ブランド品が所狭しとばかりに並ぶ店頭、冷暖房の行届いた室

内に居ながらにして世界の情報を耳聞できる現在、整備された道路に続く車々の列、林立する高層ビル等、数え上げれば限りがない程有難くくめの今の経済大国日本に、戦争中の辛く悲しかった生活も次第に風化しそうな現代です。米は配給制になり自由に買えず、とうもろこしの砕いたのを米に混合した配給米、南瓜をを買うのに長い列に加わったり、缶詰に云つ石の塊のような塩、コッコツした



無漂白の粗い布地のタオル、学習用のノートの質も薄く、汚く、形だけは石鹸の形をした泡も立たない粘土の様な石鹸、肌着も買えず、古い衣類を代用しての下着作りや、甘藷薯を入れた雑炊も、米はほんの少しかけて丼に顔が映りそう。砂糖等はとも入手出来ませんでした。そんな生活から命を守る為に、軍需の衣類が米や麦と交換する為に減っていきました。「欲しがりません勝つては」のキャッチフレーズに我慢を強いられる耐乏生活でした。明りが見えたら攻撃の目標になるので、暑い夏の夜も窓や雨戸を閉め切り、曇で黒く塗った紙を張りめぐらせて部屋を暗くしての生活、B29襲来の警報が鳴る度に防空壕へ飛び込み、冬の夜等は折角ぬくもった被団炬燵も布団から出し、やっとB29が通過し、やれやれと思って布団にもぐり込んで、冷えた身体は中々ぬくもらず、炬燵は疾うに消えていると云う生活の繰返でした。

いつか真昼、敵機の編隊で来た敵機が急低下して、いきなり機銃掃射をはじめ家の裏に落ちてあった里芋の葉を、シューッと貫いたのを身近で見た時は、血も凍る様な思いでした。同じその日、国體構の上で射たれて死んだ、玉手山遊園地でも何人かが、との情報が入る度に危機感が迫って、生きた心地もない日々が続きました。昭和二十年三月未明の大

阪大空襲の時は、当時住んでいた柏原からも、赤く焼けている大阪の空が見えました。焼夷弾が雨敵と降って、一面に火の海となり、防火用水の水槽に溜水になっていた水が沸いていたとか聞きました。その一面に焼野原と化して了った跡に、身を寄せる田舎もない人か、はた又、焼け落ちた我家の跡が恋しくて立去れないのか、雨露も凄まじい様な小さな拙立小屋が、たまにポツンと建っていました。八月十五日の戦争終結の天皇陛下の玉音放送は、正直云ってホッとしました。何分にも毎日が死との隣り合わせだったのですから。

の再開を夢見て復員した将兵が見たものは、一面の焼野原。家族の安否も判らぬ儘に梅田のガード下に戻った人達もいたのです。着のみの徳の汚れた軍服姿で飯盒や缶詰の空缶で食事を作っておられました。じっと寝た儘動かない人は、既に事切れた人達でしょう。冬と云うのに時折パーッと魂が飛立つのです。折角故郷の土を踏んだと云うのに、全くの地獄図絵です。天王寺駅の構内でも、復員軍人で死んでいる人が何人もいました。市のトラックが来て、積んで行き、何処かで火葬にするのだとの噂でした。

私の主人が再度の召集で、昭和十九年九月



初め郷里の金沢の連隊に入隊し、数日して情しく出征しました。そして翌年五月には戦死でした。東京前の日本橋東端の南島島だった事が、戦死後判明しました。小さなけれど程にじか地図に載っていないこの島を、この原稿を書きながら捜している内に、頭でうるんで見えなくなっていました。海空からの砲撃で、島の形も変わったでしょう。当時島には水もなく、雨水を貯えての生活。内地からの物資輸送も難かしく、それぞれ大変な生活だったのに、何一つ愚痴は書いて来なかつたのも、心配させまいとの配慮からだったのでしょう。そして戦後の様相が豊かになったのでしよう、覚悟の程と、二人の子供を頼むとの重

単なハガキが届いて、暫らく使りが盡のいているを思っていた矢先きの戦死の公報でした。その瞬間、私は誰もいない遠い山奥に入って声の続く限り大声で泣き叫びたい気持ちで一杯でした。金沢からかけた姑は気丈な人で「家だけじゃない。女々しい事は止めて」とボロボロ涙を流しただけでした。誰か我が子の死に対して泣く泣かない母があるでしょう。私を励ます海の愛情だったのでしょうか。時に主人は数え年三十一歳、私は二十九歳で娘は国民学校二年、息子は四歳でした。出征の時息子は重い肺炎で重傷を飲む毎日、妻はこけな我が子との辛い別れば徳びがたかつたことでしょう。大阪駅迄来なくも良いとて、国豊



橋の上で別れました。遺骨は一度清水艦に沈められ、多分石だったろうと云われ、次の遺骨は、町の規定で御霊筋の本願寺別院で安置されて、あの空襲で消失し、郷里のお墓には遺髪、爪、大好きだった絵が納められています。

南十字星輝くと云う南の島を真赤な血に染めて、お国の為にと散った人々の霊は、今も彼の地で眠っているのでしょうか。望郷の念に燃えて。戦争程残酷極まりない行為があるでしょうか。この悲しい思いを再び可愛い、子孫に味わせない為、平和憲法をしっかり守っていきましょう。



はたきぎを拾ったりして、そして、お米を手に入れるために、大阪から苦労して帰った着物を手放しました。

味真野は静かな山間の村で、戦争の影響もほとんどありませんでした。しかし一度だけB29の空襲を受けたことがありました。機銃掃射を避る米兵の顔がわかるような近さからの攻撃でした。なぜこんな村を？なにがなんだか判らないうちに、子供やびとつになつて畑に伏せていました。

姉夫婦が大阪の家を明け出されて尋ねてきて、一緒に暮らしたのは何か月位だったのかもしれないが、とにかく疎開生活が苦しくなってきたといえは嘘になりますが、夫の留守を守ら



復員した父の顔が 分らず泣き出した娘

浜寺支部 池田ナツエ



私は大正三年、福井県今立郡味真野村（現武生市）で、六人兄弟の末子として生まれました。高等小学校を卒業して、十七歳で姉達を頼って大阪に出てきて、昭和十年に結婚しました。夫は染物の型おき職人で、主にはっぴなどを染めていました。そして翌年長男を出産。昭和十三年七月、日中戦争に突入と同時に夫は出征し、翌年冬帰宅しました。

物不足がじわじわおしよせてきて、なんとなく暗い社会になってきました。その中で次男と長女に恵まれ、親子五人、太平洋戦争に突入したといっても、どうにか平穏な市民生活を送っていました。しかし十八年冬、夫は再び陸軍歩兵として出征しました。

夫の留守は何といても心細く、翌年故郷へ帰りました。両親も既に亡くなっている実家は敷居が高く、隣村の空き家を借りて母子四人の生活を始めました。小さな畑で野菜を作ったり、近所の縫い物をしたり、子供たちを養うには、子供達を元気に育てなければ、と必死で生きてきました。

二十一年冬、夫が復員し、味真野村の家を尋ねて帰ってきてくれました。昏太麗びしたのほもろろんですが、四歳になっていた長女が父親の顔を見ておらず、「知らないおじさんだ」とワアワア泣き出し、夫が困った顔をしていたのを、今もはっきり覚えています。

夫も戦地では大変な苦労があったようですが、極寒の陣州での衝兵としての夜中の勤務は辛く、骨まで凍るおもいであったといふことです。そして夏の暑さも格別で、マラリアに感染し、生死の境を何度となくさまよったそうです。なくなった戦友の遺骸を茶屋に付す

とき、その戦友の帰りをまわっている家族のことを思い、明日は我が身かと本当にづらかった、だからせめてもの供養にと、青森に骨を丁嚙に入れて、表に戦友の名前を一字一字心をこめて書き込んだそうです。

二十五年に姉夫婦がひとあし先に大阪に歸り、翌年私達も七年の疎開生活に終止符をうつて、味真野村をあとに大阪に歸りました。

夫は一昨年なくなりましたが、子供達もそれぞれ家庭をもち、元氣な孫達にめぐまれて、



私は私で教会での奉仕活動や民話や詩吟やお茶と好きなことをして、毎日幸せに過ごしています。

どうか、この平和な世の中がいつまでもいつまでも続きますように、お祈り致しております。

(聞き書き)

私の青春 カーキ色でした



恩智支部 今西年子

昭和十九年、私は十七歳、戦局もかなり緊迫してきているものの、また学校も秋までは授業も出来ました。それからは授業と「学校工場」での作業を交互にやることになりました。私達の「学校工場」とは、教室の一部を改造して軍服の縫製工場にしたもので、兵隊の着るあのカーキ色の木綿の上着と袴下(ズボンとは言いませんでした。多分教性語は使うなどということでしょう)を動力ミシンを使って仕上げておりました。達成目標などがあった、それはそれは一生懸命やったものです。その学校工場の監督に軍人が出入りを

しておりました。当時のことですから木造校舎で、廊下も板張りでしたが、油がまする曲がなくて雑巾がけをしたあと、空ぶきでピカピカに磨いておりました。私達は当然土靴に履きかえたり、ない人は素足で歩いていました。そのところを軍人たちは土足のままですかずかと上ってくるのです。大変感傷っていて誰も何も言えなくて、その態度は腹立たしいものでした。

年が明けて昭和二十年一月二十日から、ついに本物の軍需工場に行くことになりました。伊丹市にある部屋航空計器工場です。京都府綾部市に本社のある部屋製糸の伊丹工場なのですが、戦争になって軍需工場に変わっていました。そこでは全員寮生活でしたので、私達も十畳ほどの部屋に七、八人に分れて生活をすることになりました。当然のことながら食事もあります、喉を通らない時もよくあり、寝はなれない作業だし、夜は夜で空襲警報で起され、睡眠不足や空腹で家に帰ることはばかり考えておりました。

三月十三日未明、の大阪大空襲の時は二睡もしないで、まっ赤に燃えている大阪方面の空を見ながら心配しておりました。朝になって帰宅許可が出て、すぐに家へと急ぎました。交通機関が不通のところが多くてひたすら歩いてやっと家に着きました。幸いに私の家は

焼けていなくてほっとしました。けれど級友の中には家を焼かれたり、防空壕に逃げてその中で家族がなくなったり人もおりました。

そうこうしている間に、半年間の動員期限がきてやっと軍需工場での寮生活から解放されました。

ところが、二、三日の休暇のあと、又別の動員が始まりました。いまのJR学研都市線の住道にある三松葉航空機という木製飛行機工場です。新しく出来た工場とことで、まだ軌道にのっていないらしく閑散とした軍需工場でした。もっこの頃から私達は、この戦争は勝てないと思っておりました。けれど真面目に、しんどくても休まずに自宅から通っていました。

空襲はいよいよはげしくなり、仕事よりも毎日逃げてばかりでした。或る日、空襲警報中、家へ帰る途中のことです。警報中は電車が止まりますので、友達と二人で歩きながら近鉄電車の今里駅あたりまで来ました。突然爆音のような音がしましたので、それは小さな屋根のある小屋の物かげにかくれました。

続いて爆音がすぐ近くに降り、焼夷弾の落ちてくるのが見えましたので出陣に、その場を逃げて近鉄電車のガード下へ走りこみました。その後、私達がさっき迄かくれていた、まさにその場所に焼夷弾が落ちました。もう

二人共まっ書で何も言えずガタガタふるえておりました。もし何秒かおくれでいたらと思うとゾッとしました。とにかく恐ろしかったことだけは忘れることが出来ません。

それにしても那是の航空計器工場、三松葉の木製飛行機工場での仕事で、私達の通ったものが一体何の役に立ったのでしょうか。せっかく入学した学校も中断して軍需工場への動員ばかり、食糧不足もひどくて配給制でした。不十分は衣料品などで物々交換をして最低のものを補っておりました。昼も夜も空襲空襲でおびえ、疲れまっておりました。

四十数年たった今も、私は忘れ得ないことがあります。広島原子爆弾、中津敷のひめゆり部隊のことです。このことを聞くと胸がキュッとなります。那是の航空計器工場では、広島女学院の方連とは同じ時期、寮生活を一緒にしましたので、広島に原爆投下と知った時は、皆さんどうだったのかと気になり、又、ひめゆり部隊の人達が中津敷の時には自決という痛ましい結果になり同年齢だけにひどいこととは思えなくて、終戦後学校にもどった私達はよくこのような話になると思はず涙が出てしまいました。

今年はじめの高岸戦争のニュースを見ていて、いつの世も戦争の犠牲者は、私達国民なのだ—and改めて思いました。そして平和を



守るのもまた私達国民なのでしよう。

死ぬ時は親子一緒に

春日丘支部

久世祐司さんのご両親



夫「昭和二十年、当時私は三二歳、住まいは大阪市谷町五丁目、ある工業組合連合会に勤めていました。敵兵検査で持病の持核のため丙種となり、国民兵として在宅していたのです」

妻「私は二八歳、一九年の暮れから私の母の実家のある能勢へ、長男、長女、次女を連

れ疎開していましたが、四人目の子を身ごもってすぐの頃でした。阪急も能勢線もわりに動いてしまったので、終点の吉川までは案に行

くことができませんでした。しかしそこからは木炭バスの便も悪く、歩いて峠をふたつ越えました。そして実家の近所の難れをお借りして住んでいました。配給は私が自転車でもりにいきました。米やアンモニア臭い魚(にしん・たらこ)など、配給帳に記入してもらって受け取るのです。でも在所の人達のなんとはなしの冷たさにはみじめな思いをしました。母は地の人ですが、私はよそ者なんですね」

夫「三月十三日の夜から十四日未明にかけて、B29による低空焼夷弾攻撃を受けたのです。私が目にしたのは、秦荘方面に雨のように降り注ぐ焼夷弾と、西からの火の手でした。結局心斎橋から堺筋までが焼けてしまったのです。日本軍の高射砲もまれに命中したのか、B29の残骸をみたことがありません」

妻「その十三日の夜、大阪が空襲を受けて真赤に燃えているのが、能勢からはっきり見えました。主人の身の上が心配で、やもたてもたまたまず、お米一升をおむすびにして、石油に野菜などを詰めて背に負い、地下足袋を履いて提灯を手に、翌朝早く家を出て峠を越え、阪急で大阪へ出ました。家が無事だったので嬉しかったですね。主人はもちろん轟

んでくれました。主人の顔を見て安心しましたので、その日のうちに能勢に帰りました」

夫「四月八日、とうとう私に赤紙がきました。丙種の者に召集があるとときは日本が負けるとき、といわれています。とにかく本籍地である岡山の歩兵第十連隊機関銃隊に出国しましたが、検査の結果召集免除、即日帰郷ということになりました」

妻「五月、能勢から大阪へ家族全員帰ってきました。家具も全部牛車に積んで。今夜にも空襲があるかわからないけれど、死ぬときは親子一緒に、と覚悟したんです」

去六月七日の昼あの大空襲がありました。私は正雀へ買い出しにいって、米は手にはいらず野菜や芋を、私の常備菜であった胃薬と交換してもらっていました。大阪がやられていると聞いて大慌てで阪急の軌道を走りました。夕方榮島に辿りついたとき、高架橋で女性が走っている姿のままで、長柄橋では馬が馬主と共に死んでいました。床に大穴があき、河川敷きにはたくさん死体が並べられていました。天六から南は火災の余熱で歩けず中津一大阪駅一曾根崎一御堂筋一久宝寺とようやく帰ってきました。家が無事だったのは奇跡をみる思いでした」

妻「ゴォーとかサァーとか雨のようなB29の焼夷弾攻撃に、子供と一緒に防空壕にとび



こみました。前の通りの家の棟が、大きな音をたてて崩れ落ちたときには、もうアカンと叫びました。空襲のあとには必ず風が吹きます。火事場の焦げたような、葉臭いようななま暖かい風が、目もあけられぬ位強く吹きつけるのです。目が真赤になり、痛くてたまらないのです。そしてそのあとは雨、焦げ汁のような真っ黒な汚い雨です。それにかかった衣類はドロドロに汚れてしまうのです。」

夫、広島・長崎に新型爆弾が落とされたこと聞いたときは、もう最後だと覚悟をきめました。そして、それに止めを刺す八月十四日の砲兵工廠への空襲でした。大阪の街が焼け野原になったのに、その日まで工廠は不死身で作業し続けてきたのです。そして終戦、いや敗戦です。」

妻二十月に三女を出産しました。家族全員無事だったこと、家が無事だったことは本当に幸せでした。警戒警報に脅え、空襲に逃げ惑った怖さは、二度と子や孫に味わわせたくありませんね、平和が一番ですよ。」

(聞き書き)

ヤミ米一升が 給料の半月分

貝塚南支部 披村益子



昭和二十年八月十五日、終戦を迎えました。やっと暗い生活から、明るい日々が送れるのも、つかの間の喜びでした。此の日の二十八日は、進駐軍が日本に上陸して参りました。国防色の服、シーブ・トラック、背は高く目は大きく、たえず口をうごかしていました。英語も不自由でした。私の英会話の本を手にして下まな英語より彼らの日本語の方が上手でした。

私の勤務している会社は、進駐軍の要になりませんでした。勤務しない人はたえず事務所で見込んでいました。当時日本には少なかったお菓



子をたくさん持ってきては、色々な話を話して行きました。

国内では物資は不足していました。お金のたくさん有る人はヤミ市で何でも手に入りました。焼けたされた人、働く所のない人は貧乏な生活でした。

餓死者が大勢出る事でしょうと言われ、其の一人にならない様に一生懸命食物を集めに参りました。農家にとって、着物、洋服ではないとお金では売ってくれません。米、いも類を背おうて帰途に付く、各駅で警察の人に見つければ取上られた事も有りました。残念でした。こうした物資の不足の上、夜になると二時間おきに電気が消へて、くらやみの二時間でした。ロソク、懐中電灯も手に入る事もなく、苦しい生活でした。

ヤミ米が一升、二百五十円でした。給料は五百円あればいい方でした。米を買へば其の他の物を買う事が出来ず苦しい生活でした。

終戦後には、巷に復古音頭が流れて、昼夜の別なく、おどっていました。

一銭五厘の葉書で、大切な父、夫、兄を戦場に送った家族、お国のため、一生懸命にお働きになった事でしょう。戦後の守がたげれば、何の心配もなく勝利すると信じていました。重国の母、妻といはれましたが心の中は淋しい事だと思いました。

四十数年立ちました今日、何の不足もない生活、本当に戦死した人々への感謝で一ぱいで

炎の中に消え去った物 すべてが愛しい

藤井寺東支部 F・I



昭和二十年六月の大阪大空襲で、私達一家は家や家財道具一切を失ってしまいました。両親を始め家族全員無事だったので、不平をいって肉親をなくされた方々に申し訳ないのですが、生まれ育った家には、飯台の傷ひとつにしても家族の思いが染みついていますし、当時私は十六歳、戦時中の制約の多い、いや多いが故に密かに書き綴ったノートには多感な少女の思いがこめられています。あの炎の中に燃え上がっていった全てのものが愛しいのです。

当時私達は大阪市福島区の阪大病院の北で、京富(支店)という屋号で和菓子を商っていました。家族は両親、私が長女で妹、弟、そして半年前に生まれたばかりの妹の六人でした。父は足が少し不自由だったので、兵役

を免れていたようです。

私は三月に清水谷高等女学校(現清水谷高校)を卒業して、大阪樟蔭女子専門学校の国語科に入学することになっていました。しかし空襲を受けたため、ただの一日も通学することなく、幻の学校に終りました。樟蔭の校章と清水谷の卒業証書だけは肌身離さず持ち続け、今も古い箱の中に眠っています。私の青春の唯一の形見です。

昭和十六年、憧れの清水谷高女に入学したときは、さあ勉強するぞと希望に燃えていたのですが、曲がりなりにも勉強できたのは二年足らずだったでしょうか。憧れの制服の着用を許されたのも同じ頃でした。

学校に軍人がくるようになり(中尉か少佐か)、女子もお国のために労働せよという命令で、女子挺身隊として枚方市御殿山にある天の川工場で、鉛筆を工具に持ち変える日々がはじまったわけですね。どうやら飛行機の部品を作っているらしく、私は一日中細い金属片をヤスリで磨いていました。天井の高い広い部屋は空気が激しく、昼でも薄暗くって裸電球が幾つもぼんやり灯っていました。こんな状況で本当に日本は勝つのだろうか?消しても消しても沸き上がってくるそんな疑問を、非国民という言葉の恐ろしさに、親友にさえ問いかけることもできず、自問自答を繰り返して



ていました。お昼の給食は丼に入った大豆カスごはんでした。

そしてあれは二十年の何月頃だったでしょう

うか、我が家が強制疎開の対象となり、旦那寺である正念寺さんに家族六人が持てるだけの家財道具をもってお世話になることになりました。正念寺さんは環状線の福島駅の南側で、近所に梅田通運があったと思います。リヤカーに積んだ荷物の中には店使っていた銅(あか)の大釜がありました。父がいつもピカピカに磨き、給を炊いていた大釜です。根っからの饅頭職人である父にとって、死んでも手放せない品であったのでしょう。

六月のその日、昼頃警戒警報が鳴り響き、焼夷弾が文字通り雨霰と降ってきました。北の方角に火の手があがったのが見えたので、本堂脇にあった防空壕から飛び出しました。走りながら後を見ると本堂が燃えています。一瞬の差で助かったのです。「阪大の地下へ走れ!」誰かの声に焼夷弾の雨のなかを、父は末の妹を抱いて、私は病弱な母を支えて無我夢中で走り続けました。阪大病院の地下は広がってたくさんの人が逃げ込みました。荷物のひとつも持ち出せなかった私達は体を寄せあって、真っ暗なかで解除になる迄じいっとしていました。「助かった!」と一息入れた時、何ともいえないいやな匂いがしてきたので、隅の方をすかしてみると長細い箱があって、腕や足が突き出ているのです。先の

空襲の犠牲者なのでしょう。外へ出たら夕方になっていました。いく所もなくなくなった私達は、家の向かいの、強制疎開を免れたお宅で一晩お世話になりました。長いお付き合いのあったお宅とはいえ、焼け出された私達を暖かく迎えてくださり、その上に豌豆ごはんを馳走してくださったのです。白いごはん

と青い豆の鮮やかさが今もはっきり覚えています。そのおいしかったことも。

翌日関西線で父の郷里の和歌山県へ向かい、そこで二三年に上阪するまで暮らし

ました。戦争がなかったら、樟蔭で好きな古文を修めて教師になって、違う人生を送れたかもしれないと、この歳になっても愚痴っているのです。

(聞き書き)

天命全うできな かった友らよ



向ヶ丘支部 峠登代子

私は呉軍港のあった当地清水通りに父と二人で住んで居りました。戦争も日毎に激しさを増し、呉もB29の爆音と共に敵機襲来のサ





イレンが鳴り渡る日々が多くなりました。横穴式防空壕を近くの山に掘るべく、隣組の方と共に作業をして居りました。完成間近になると、警報発令と同時に、一目散に皆様と共に壕に駆け込み、昼夜を問はず豪生活が続きました。

そして呉大空襲は夜でした。B29の飛来と共に油が撒かれましたので、今夜は雨だと話合って居りました。焼夷弾一発投下。忽ち二十発位の火花となって火の海です。私の友達

の家に直撃。あっと云うまに家族五人が焼死されました。又私の叔母も防空壕にて窒息死。今朝の元気な御姿の変わり様にたまた然として居りました。

私にとって忘れる事の出来ない八月六日の朝、広島に原爆の落ちた時、警報解除となりましたので、お米の配給所に着いた途端、広島の上空にピカッと光って白い大きなまきのご雲がムクムクと舞上り、轟音のすさまじさに、配給所の机の下に避難しました。そして昼頃、被爆された方々が次々と帰って来られました。服は焼け、顔手足、皮膚は焼けただけ、余りの悲惨さに直視出来ませんでした。

又広島叔父と娘さんも被爆されて亡くなりました。

私の娘時代は、戦争の為に天命を全うする事無く、故人と成られた友人知人がおられました。御冥福を心より御祈り申し上げます。

「醜いものは

着物の長い袖」



大連支部 T・M

昭和二十年八月十四日といえは終戦前日

す。その日、私は姉の二度目の出産を手伝うため、難波から南海電鉄で、泉南の吉見の里へ向かう途中、天下茶屋で空襲を受けたのです。慌てて電車から飛び降り、建物の陰に身を伏せました。その電車を目標に、B29が機銃掃射をしかけてくるのです。操縦するアメリカ兵の顔がはっきり見えました。死ぬかもしれない、という恐怖の何分間でした。B29が飛び去るとまもなく電車が動きだし、無事姉の家になどり着くことができました。姉も元気で待っていてくれ、十六日、無事に女の子が産まれました。

私は大正十年生まれで、昭和十四年に学校を卒業してすぐ銀行に入ったのですが、その頃のこと覚えていてのことといえは、給料が三十円だったこと(大学卒の男性で五十円)。すぐパーマ・ネットをかけたこと。前髪はくるくるとしたカール、あとは内巻きというスタイルで、うしろに大きなリボンをつけています。そのリボンが嬉しくて、幾つも持っていて毎日取り替えていました。

そういう娘らしいおしゃれも徐々に許されなくなり、いつの頃からだったか、モンペ姿一色になっていきました。和服をつぶして作るのですが、ふだん着は木綿の裃で、外出用には高麗織りで上下を作りました。

昭和十八年、愛国婦人会・国防婦人会・連

台婦人会を統合して、大日本婦人会が発足しました。さっそく街角に立って、『醜いものはこの決戦下にペラペラと長い袖』と書かれた大看板の下で、長袖を着ている婦人に「決戦です。すぐお袖を切ってください」と書いたビラを手渡していました。

戦局の悪化に伴い、生活は次第に苦しくなり、生活必需品すべてが配給制でしたが、その切符があっても物が無いという状態になってきて、時々売り出されるわずかな品物には長い行列ができました。

主な食べ物、おいもや大豆を入れたごはんでしたが、私はよく配給される「ナンバ粉」と、メリケン粉を水で溶いたものでパンを作りました。

それに千人針によく協力しました。肉親の無事を祈って、道行く人々に、千人針を求める婦人の姿が町のあちこちに見受けられ、私もできるだけ刺させてもらいました。

戦争の被害といっても、私達一家はほとんど受けていないに等しいと思います。家も無事、戦死者もだしていませんので。しかし、現在若い人達をみていると、戦争のためにできなかったことがたくさんあったように思います。

生きたいように生きる、思うがままに生きる。ところがどんなに素晴らしいことが、平和の

尊さを大切にしたいと思っています。

(聞き書き)

17歳、泣くなく 挺身隊

大浜南支部 横田タツエ



私は六三歳の主婦です。

元気な夫と、息子夫婦と、孫二人に囲まれて幸福な毎日を送っています。こんな私にも、青春のひとつまとして、太平洋戦争中に強烈な苦い思い出があります。思い出せば四十有余年前、一七歳頃の事です。奈良県吉野郡竜門村立青年学校本科に在学中の頃、何の前ぶれもなく急に挺身隊の通告があり、泣く泣く友だち二五、六名と一緒に、故郷を後に任地へ向いました。それは昭和十九年の一月の初旬だったと思います。任地は、愛知県豊川市の豊川海軍工廠でした。その工廠の寮、六三寮一三号に入りました。

その女性の寮長はそれはそれとても厳しいお方でした。朝の点呼、出勤の点呼、消燈時の点呼、その度に寝具のたたみ方、押し入れの物の入れ方、掃除等、何につけても厳し

く厳しく、鞭^{むち}打られてきました。

その頃の食事と言いますと、大豆の油をしぼった粕、要するに豆粕大半の御飯でしたが、お腹の空いた私は、何一つお菜のない食事を、むさぼる様に食べたものでした。工場は信豊工場で、夜勤と昼勤とに別れ、大勢の人にまじってなれない仕事に精を出していましたが、その内に、空襲また空襲の生活になりました。空襲になりますと、速い浜松の防空壕の方まで必死で避難しました。何時も何時も苦しく、今でも苦い思い出です。それでも休みの日になりますと、豊川市の郊外のお百姓さんの家まで、お芋を買いに行きました。その事が唯一の楽しみでした。蒸したお芋を



って、二日も三日もそれを大事に食べた思い出があります。

友達が大量一掃だったので、何とかそこで辛抱できたのだと思います。その頃、一度帰省した事がありますが、交通事情が相当に悪く、同じ村から行った友達と二人、線路の上を歩いて家にとどろついたことがあります。

ひるでも暗い山道を歩いて家に着いた時は、両親や兄弟はびっくりしていました。電話もなく、家へ連絡する事が出来なくて、迎えを頼む事もできませんでした。

そうしている内にも、空襲が度重なり、何時も生きた心地はありませんでした。

翌年三月頃だったと思いますが、突然大阪府泉南郡吉見の里の、豊川工廠(こうじょう)吉見工場の方へ転勤しました。でもそこも工場で働きながらも、敵機の空襲で明け暮れました。大阪も当然ですが、和歌山の空襲の時は大変でした。和歌山と泉南は近くですので、空襲の時には、照明弾が先に降って、天空で炸裂して地上を昼の様に照らし出します。よく見渡せるようになった地上に向けて、焼夷弾が降る様子が落ちて来るのです。恐ろしくて恐ろしくて、田舎の母を思い出し、心の中で「お母ちゃん」と幾度呼んだか分かりません。私の経験した戦争と言うのは、鉄砲をかついで敵と戦ったと言う、壮烈なもの違って、なす術もなく、



ただ逃げ惑ったというだけのことだったので、今も恐ろしかった時の事として心の奥に残っています。

空襲は夜、回を増し、昼は艦載機が襲って来ました。工場の軒すれすれに近づき、パリパリと弾丸を落として行くのでした。

昭和二〇年八月一日、玉音放送で終戦を知り、工場長の説明で日本が負けたのを知り、涙しましたが、負けて残念なのと、これで家に帰れる喜びが入りまじり複雑な気持ちでした。それから自分の持ち物をまとめ、三日

国のために一生懸命務めて参ります」と行って出掛けて行きました。この兄の時はかなりはっきりと頭に残って居ります。

それからこれは、母の思い出になるのですが、次男の兄が二度目の出征をして行く時の事です。四人目の兄と同じように台に上り、「このたびこそはお国の為、命は天皇陛下様に捧げて参ります」と言って出征したそうです。この兄の職業は警察に勤務していたので、精神的にすごいものがあつたそうです。今の若い人達には余りわからないでしょうね。この兄の出征が母にとって一番悲しかった様で、三日三晩泣き通したそうです。とてもとても家思いの子だったそうです。兄達の教育の科目には、修身という科目がありました。この科目がその時代、教育にとっても良かったのでは？と私は今感じます。

それから一番かわいそうであった兄の思い出を書かせていただきます。この兄は足に銃弾が貫通し、そのまま戦病死でした。中支の方面はとても物不足な所で、戦場のテントの中で病んでいたそうです。中支の夏は暑く、足の傷がいたんでウジがわいて、その部分をスポンジで取ったりしていたのだそうです。これを聞いていても、物が無い状態が良くなる様な気がしました。このお話は、命の助かった戦友が帰って来られ、お話しして下さい

後に布団を背負い、また線路の上を歩いて家に向かいました。負けた悲し涙と、家に帰れる嬉し涙がまぎりあって、泣きながら重たい布団を背負って歩きました。

その時の気持は、何と申したくもありません。現在日本は経済大国、そして平和な国となり、湾岸戦争と言えども、どこかの国の事だなんて大勢の人は思われていたと思います。しかし、もしこんな戦争に実際にかかわっていたら、大事な息子や孫まで犠牲が及ぶと思うと身体ふるふるのを覚えます。戦争はしてはならないのです。憲法をしっかり守らなければなりません。

兄に送れなかった 家族の写真

向ヶ丘支部 S・T



戦後四十六年が過ぎ、苦しかったその頃のことを忘れ掛けている今頃です。この様なことを書いて皆様にお読みになって頂くほどの物ではございませんが、私の頭の中に残っている、その頃の思い出を書いてみました。私の実家は、三人の兄が戦死いたしました

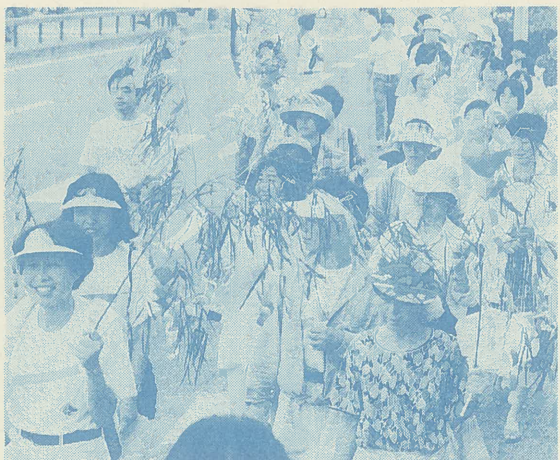
ました。この兄が、家族の写真を送って欲しいと手紙をくれたことが有りました。きつとテントの中で病んでいる時にほしかったのでしょう。その時送って上げれば良かったのに、あとで皆が涙をこぼしたのが思い出されます。その頃の日本は、戦争の真最中でそれどころでは無かったのです。この兄の遺骨はもちろん有りませんでした。本当に戦争は何も為ならず、あとに苦しみが残るのみです。今や生活そのものを見直す時が来たようです。母なる地球の環境の危機に心が痛みます。

原爆投下も知らさ れず終戦を迎えて

河内長野東支部 S・N



支那事変から大東亜戦争に突入して、「欲しがりません勝つ迄は」の標語のもと、お米・砂糖・衣類等すべて切符制となり、食糧盛りの私達の前からみるみる物資が無くなり、ケークはおろか、菓子パン類も目にする事が出来ませんでした。デパートの食堂で母親と長蛇の列の後、やっとテーブルに座って出て来たのは、真黒なドングリパンと、塩・胡椒だ



遺族の家でございました。思い起こしてみますと、一番上の兄は輸送船で戦死しましたので、遺骨はもちろん有りませんでした。次男の兄は、一度目は家に帰りましたが、二度目の出征で戦死しております。三人目の兄は、中国北支で戦場に出ず、無線の方でしたので帰りました。四人目の兄は、中国中支に出征いたしました。この兄の出征する時の様子が、今でも思い出されます。果物箱をひっくり返した台に上がり、肩から名前を書いたタスキをかけて、近所の皆様に挨拶していたの思い出します。「ただ今から出征いたします。お

けのスープなどで、がっかりしたのを今でもよく覚えています。

女学校（旧制）に入り、戦争は厳しさを増して、勉強どころではなく、学徒動員で他校の男子中学生（旧制）女学生と共に、軍需工場へ、お国のために働きました。しかし、米軍機は、この和歌山の工場にも容赦なく攻撃を加えて来ました。明けても暮れても空襲で逃げまわる毎日でした。防空壕の中に居てさえ、焼夷弾のシュルシュルとたえまなく落ちて来る音が、体に突きささる様に痛い思いがしました。又すぐ側で、男子生徒の何人かが、大型爆弾で死ぬと云う悲惨な事もあって、子供心にも死の恐ろしさを感じ知らされたものです。

戦争も末期症状を呈し始め、生産はストップ、空襲も日夜をわかつたず敵しさを加え、街は只、ただ広い廃墟となって、みんなどこか先どうなるのかと、話し合う日々でした。

広島、長崎の原爆投下も知らされず、八月一五日、いきなりの敗戦発表のあと、当時、三年生だった私達は、半年後に荒れ果てた校舎に戻りました。こんなつらい思いは、絶対にもうすまいと心に決めて――

その後戦争体験者は、それぞれの思いで生きて来ましたが、現在核保有国が増えていると聞きます。お互い核を使って戦いを始める

どうなるのか――。第二次大戦どころではないでしょう。広い宇宙の中、唯一、生物生存の星である地球を傷付け合って滅亡に導く、それだけは止めて欲しい。そう願う毎日です。

引揚げ船の中から 消えていった死体

河内長野東支部 H・F

私は、鉄原（今の朝鮮民主主義人民共和国）で終戦をむかえました。

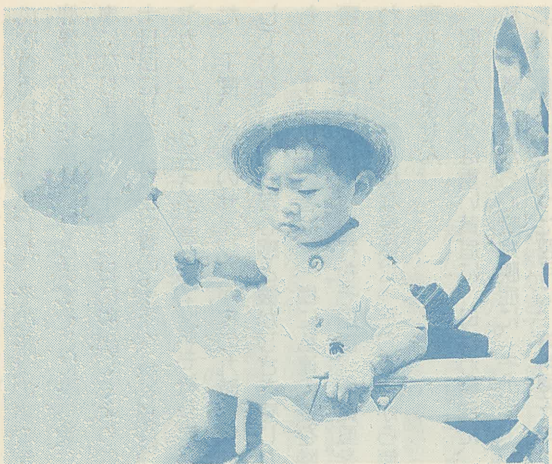
「日本は戦争に敗れました」
「皆さんと長い間、勉強をして参りましたが、今日で暫くお別れ致します」

「身体に充分気を付けて下さい。さようなら」
力のない校長先生の声に他の先生も天を向いたり、涙しておられました。先生方に、早く家に帰る様に促されて帰ると、父が庭の隅でアルバムをばらばらにして焼いて居り、母が押し入れの中の物を袋に詰めていました。子供心にも異様に感じた私も、机の中を整理しながら、つい四、五日前の学校での光景を思い出しました。

その日から、脱出する迄、釘づけにされた家から一歩も出られなく、オンドルの下で声をひそめ隠れて居りました。

そして二十日の夜、父の部下の方の案内で、家族五人逃げる様に社宅を後にし、駅に走り出しました。脱出です。何家族が集まっていたのでしょうか。次々に乗り込んだ列車は、鉄の格子の入った家畜車で、無言であわただしく鉄原駅を後に、京城へと向かったのです。その内暗闇を走っていた列車が、パンパンと言う

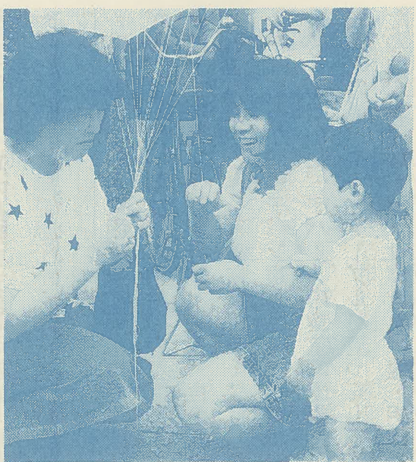
※ 暖房装置のこと。床下に煙道を設け、これに燃焼空気を通じて室内をあたためる。



銃声が響いたと思ったら、ドスンと言う音がして止まったのです。何事かと戸のすき間から見ると、ソ連兵が、父と他の何人かを取り囲み、何やら話していましたが、突然銃をつきつけられて、何処かに連行されて行ったのです。私達の住んでいた鉄原は、三八度線より北であり、止められた所もまだソ連領だったので。それからどう言う訳か列車が動き出し、やっと京城に着き、東大門近くの会社の寮に収容されました。

他の家族がほとんど南下していくのを尻目に、父が帰ってこない私達は、脱出組の最後の家族となり、不安の中で毎日を送っていました。そうした或る夜、全身傷だらけでパンツだけの姿の父が、ドアの外に立っていました。顔は腫れ上がり、その形相はお化けとしか表現出来ない程変わり果てた姿でした。一寸した物音にも怯える父は、一刻でも早くここを離れたいらしく、次の日、戒嚴令の京城の街を、追われる様に寮を出たのです。目ざすは南へ南へと釜山港……。

昼間は少しでも多く歩き、夜は人目をさけて家の軒先を借りたり野宿も止むなくでした。食べる物もなく、最後に残った父の時計と交換した麦のおにぎりの味、今もって忘れる事が出来ません。ようやく釜山の街に入りましたが、昼も夜も危険と言う事で、釜山第



突然、警戒警報の前ぶれもなく、翼に目の丸をくっきり見せた三機の飛行機が校庭に表われ、私達は一生懸命手を振ったのです。それを見ていた先生が絶叫にも似た声で「敵機だ。早く机の下に早く早く！」と……それが言い終わるか終わらない内に、バリバリバリと校舎が裂ける様な音がしばらく続き、間もなく飛行機も遠ざかって行きました。今から思えば、B29の爆撃機だったので。

多くのお友達と先生が犠牲になられた事を、後から知りました。何よりも、何故日の丸を付けてアメリカ軍が爆撃に来たのか、戦争だから仕方がないとしても、余りにも卑劣な行動に子供心にも疑問が残り、今もなおその気持ちに変わりはありません。それから数日後に終戦の日を迎えたので御座います。

一国民学校に収容されました。ここでも兵隊さんと一緒に、敗戦に自暴自棄になった数人が軍刀を振りかざして暴れ、とても生きた心地がしなかったのを覚えて居ります。その兵隊さんからマラリアを移され、家族全員罹って、足止めされました。四二度という高熱に、沢山の人が死んで運び出されるのを、ぼんやりと熱の中で眺めていました。食糧も、おからとせんぎり、塩ひとつかみを、来る日も来る日もバケツで貰いに行き、弱った体にむりやり口に押し込みました。

それでも、ようやく家族全員元気になって釜山港を出る日が来て、港を離れた時父も母も泣いていました。でも船の中では孤に巻かれた死体が、幾つも幾つも海に流され消えて行きました。この光景も今だに、夢の中に現れ、終生消える事はないでしょう。思えば肉親の方々は、どれほど、もうそこに見える内地に連れて帰ってあげたかった事でしょう。

着いた港は仙崎でした。博多港の予定が大分流された様でした。あの広島も通過しました。辺り一面焼野原で、トタン屋根だけの駅でした。駅から列車が少し離れた所で、鉄道が寸断され、線路を当てもなく歩く事になり、とうとう野宿をしました。山台の畑の中で、父が見つけて来た生の大根、さつまいも、南

瓜を食る様に食べました。その後父の実家が徳島にある私達は、ひとまずそこに落ち着く事になりました。十月二日に脱出してより四十日目にして、着のみのままの、持ち物は、ヤカン一つと云う引き揚げの旅も終わりました。丁度、学校のサイレンが夜の九時を知らしており、とても安心感と懐かしさを感じたものです。親類の者は、一様に私達の姿を幽霊かと疑いました。それもその筈、全員虱をわかし、折れる様な身体だったのでから無理もありません。

間もなく父は重い黄疸に、母は心臓病に、私も栄養失調から心臓弁膜症に、その中で幼ない六歳の妹は帰った翌月に、弟も翌々年に八歳で短い一生を終わりました。その後、父も五八歳、母が五二歳で若く去り、この様な体験も私だけが知るのみとなりました。

毎年巡って来る八月十五日、何か書かなければ残さなければ、と言う押さえ切れない熱い思いが、走馬燈の様に何年も何年も目の前をよぎって行きました。

毎年、新聞や本にこの時期に掲載される戦争体験記には必ず目を通したのですが、自分が書くと言う事においては、なかなか決心がつかず、その時になると逃げたくなる気持と、書かなければと言う気持にかられ、常に複雑でした。今にして思えば、この事に関

して、何も口に出さなかった父も、この様な思いだったのでしょうか。

あれから四十六年、時代も昭和から平成にと移りました。サミットにも参加という、押しも押されぬ日本は経済大国になりました。一見平和で豊かな日本国ですが、この発展には、多くの犠牲があったという事を、今もって忘れてはならないと思うのです。

国中での空襲は勿論、悲劇は沖縄でも、侵略して行った南方や中国、朝鮮からも、生命



終戦を迎えた頃



河内長野東支部 H・S

支那事変の時、私の兄は、兵役義務により、二二歳になった時、野砲兵として信太山にある兵舎に入営して行きました。そして、一年後、戦場(中国)へ送られました。それから昭和一八年に一度、日本に帰ってきましたが、また一年後、今度は赤紙がきて召集されていきました(大東亜戦争)。その後、戦争は増々激しくなり、一年も満たないうちに戦死の知らせが来ました。それは終戦とわかる直前の事でした。

戦争中は、空襲警報のサイレンが鳴ると電気のかき黒い霧をかぶせ、B29が通り過ぎるのを待ちました。この辺は被害はありませんでしたが、下の方(堺方面)の空は真っ赤でした。毎晩のようにそういう状態が続いた頃は、物資も底をついてきたのでしょうか、馬草と云う馬に食べさせる草を山に刈りに行き、それを干して一束ずつにし、各家ごと、数が決められた(軍に差し出す)ようにいわれ

ました。また、食用の油でなく、軍用に使う油を取るため松の木根っこが掘りだされ、それが、道のあちこちに転がっていたのを覚えています。

食べ物は、野菜などは家で作れたので、イモ類やかぼちゃなどをたくさん植えました。米は自分の家の分だけ残し、後は全部差し出しました。

終戦後、食べ物や物資の不足はますます激しくなり生活用品、衣料品もみな配給制でし



からが引き揚げて来た人はまだしも、心ならずも生命を亡くされた方々こそ、戦争被害者でなく何でありましょう。今だに残留孤児の問題は、中国のみでなく、北朝鮮にも沢山おられると思います。まだまだ戦争の傷跡が深く残っている事を感じる時、真の平和とは?と考える時があります。

一度は必ず訪問したい、父母と私の、第二のふるさと朝鮮ではありませんが、思い出が複雑に交錯して卒直になれません。四年生で味わった体験が、余りに突然に、大きな波となり押し寄せ、理解出来ない迄にも何か戦争の傷跡として残ったのは間違いない様です。

どうして、家も、何もかも捨て、泥棒みたいに逃げて、逃げて、何故内地に帰らなければならなかったのか?四年生の子供であった私には理解出来る筈ありません。

日本が、あの時代におこってきた事、時代がどんなに移り変わろうとも、あいまいにせず直視して、次の時代に正確に語り伝えなければなりません。二度と戦争を起こさない、起させない為にもそのことがわたしたちの戦争を体験した世代の義務だと思うからです。

た。しかも配給されたわずかの生活用品・衣料品すら、食べ物と物々交換(農家で)するありさまでした。終戦後のしばらくの間、アメリカ兵が来て連れていかれるなどの話が行き交い、どこにも行かず生活していましたが、少し落ち着いた頃、村から焼野原になった大阪市内へ死骸整理にかり出されました。大阪市内に行く時、家などは一軒も残っていませんでした。

戦争中、戦後の生活



河内長野東支部 Y・H

昭和一八年の夏の初め、私は愛知県豊川の軍事工場へ徴用にとられました。理髪店を営んでいたので一回目の徴用は逃れたのですが、二回目の召集令状で、年老いた父母に店を任せて行きました。

そして翌年結婚したのですが、一日の目当が一銭五厘でした。食糧、生活必需品はすべて配給です。お米の配給があっても、お米を炊く木がないので、近所の人達と、三キロ、四キロも離れた山奥へ木を捜しに行くのが妻

の仕事でした。又、米を炊くのは、土鍋で金
鍋類はすべてありませんでした。しょうゆな
ども配給でしたが、それを入れる瓶を買うの
に、朝から店の前に行列をつくって並ぶので
す。そんな毎日でした。

長男が生まれ、里へ帰した妻と我が子に会
う為休暇をもらって帰るのも、国からの証明
書がなければ列車にも乗れなかったのです。
やっと列車に乗れたかと思ったら、途中で空
襲にあい、命がらがら会いに行つたのと思い
出します。

そして終戦になり、石炭箱列車に乗って帰

って来ましたが、どの列車も鈴なりの人々を
乗せて、また汽車に乗れない人が、無理に列
車の脇や手すりにつかまり、振り落とされたり、
トンネル内で煙による窒息死で亡くなられま
した。

戦争が終つてからも、多くの人達が無駄死
をされました。こんな戦争は、もう二度と起
こして欲しくないと思います。

私は、戦地に二年二ヶ月と軍事工場に二年
九ヶ月おりましたが、一ヶ月足りないという
事で軍事恩給はもらっていません。でもこう
いう方も多くおられます。



食糧難、物資不足 のあの頃

河内長野東支部 M・O



空襲や戦災には直接遭わなかったので恐ろ
しさは少ないが戦中戦後の食糧難、物資不足
にはとても困りました。

タバコ・小麦・砂糖の配給行列。外米にコ
ーリヤンを混ぜたポロポロのごはんでこども
がお腹をこわし、下痢が止まらず困った事も
ありました。また、農家の手伝いをし、野菜、
米等を分けてもらったり、空地を耕し、自給
自足をしたりもしました。でも思う様に出来
なくて、出来た頃には盗まれた事もあり
ました。

イモや魚を賣出しに、鳥取まで出かけた事
もあり、砂糖の替りに、製薬会社でブドウ糖
をわけてもらい、それを使った事もありまし
た。

洋服なども、和服地で作り直し子供に着せ
ました。

(河内長野東支部の五名の方の文章は、支
部ニュースとして発行されたものを、掲載さ
せていただきました)